

中世パリ大学における学位制度と教育の課程

——十三・四世紀神学部の〈baccalarius〉及び〈magister〉を中心として——

松浦 正博

(2011年10月11日 受理)

La régularisation du système des grades et les programmes de cours à la Faculté
de Théologie de l'Université de Paris aux XIII^e et XIV^e siècles

Masahiro MATSUURA

Résumé

Cette étude a pour objet d'analyser le processus de la création du système des grades à la Faculté de l'Université de Paris à partir du début du XIII^e siècle. Ce système ainsi que l'organisation détaillée des examens se précisèrent au cours du XIII^e siècle. Les universités octroyaient des grades qui garantissaient la capacité de leurs titulaires à enseigner. À partir de la création du système des grades, les conditions requises pour obtenir les grades de *baccalarius*, de *licentia* et de *magisterium* (ou *doctor*), ont été stipulées: limites d'âge inférieure, durée des études, programmes des cours etc.

Des recherches ont déjà été menées sur la formation et le développement de ce système par les règles d'examen. Le processus de la formation de ce système, cependant, reste encore mal connu. Les règles ne concernent que le procédé de l'examen et non le contenu. Il reste beaucoup de questions sur les examens, notamment la façon dont les candidats étaient supposés lire les textes désignés pour l'examen et le rôle que jouaient les disputes (*disputatio*). Nous nous demandons ici quel était l'impact réel des règles trouvées dans les statuts et dans quelle mesure étaient-elles appliquées?

En nous fondant sur notes de l'année universitaire 1392–1393 de Richard Basoches, étudiant en théologie, concernant *Sentence* de Pierre Lombard, nous mettons au clair non seulement la formation du système des grades selon les points suivants,

- (1) Techniques et méthodes de l'enseignement (*lectio* et *disputatio*)
- (2) Distribution des cours
- (3) Méthodes de travail des étudiants et leurs reportations

mais aussi l'influence de la politique universitaire des papes d'Avignon sur le développement du système des grades.

I. はじめに

今日、欧米でユニヴァーシティと呼ばれるものは必ず学位授与権を有しているし、学位を出さない高等教育機関はユニヴァーシティとは呼ばれない。ところで、この学位ないし学位制度は中世大学により創り出された「制度」として今日の大学にまで伝えられているものの一つである¹⁾。ボローニャ大学と並んで中世大学の典型であるパリ大学においては、その草創期の十三世紀初頭に教皇特使ロベール・ド・クールソン (Robert de Courçon, 1160頃~1219) が制定した最初の規約 (1215年) にすでに学位取得に必要とされる修学年限や聴講すべき講義科目等が明記されていることから考えても、いかに学位ならびに学位取得に至る教育の課程が重視されていたかが窺い知れよう²⁾。

学位は本来教授能力の認定という性格をもって出発したが、やがてそうした性格を喪失し、能力の証明書とみなされるようになり社会移動の一手段になった。中世後期の社会は新しい時代状況の中で新しい能力・知識を身につけた人たちを積極的に求めるようになる、その需要に応じたのが大学で新たな「知」を身につけた=学位を取得した人たちであった。ここに大学と社会を結びつける紐帯としての「学位」が誕生する。

一般的に、大学の学位の体系と試験の詳細は、十三世紀の間に明確化したといわれる³⁾。これまで中世大学の学位制度に関する研究には豊かな蓄積があるが、それらは大学の規約に深い信頼をおいて創りあげられたいわば制度の理想型であり、それらが実際に運用されたという保証はない。規約は可能性のある濫用を抑制し、防ぐために起草されたものであるといわれる時、そのことは容易に理解できよう。従って、学位制度を真に歴史的に把握するためには、単に規約等に基づいた制度的側面からだけではなく実態的側面から明らかにする必要がある⁴⁾。中世大学に蝟集した学生がめざしたものが学位といわれる時、その学位取得に至る仕組みである教育の課程、内容及びその学業の結果の可否を判断する試験の実態的側面からの研究は不可欠と考える。

本稿は、この観点に立って十三・四世紀中世パリ大学神学部における学位取得の実態を明らかにし、あわせて「一定の課程を修了した学生が試験を受け、修学と学力を認定する」学位制度のがどのような過程を経て成立するのか、またその成立に如何なる影響関係があったのかについて考察しようとするものである⁴⁾。

Ⅱ. 神学部における学位の階梯

(1) 学位の出現と勉学の課程

すでに述べたように、1215年教皇特使ロベール・ド・クールソンは「パリの教師と学生の大学」に規約を賦与した。これはパリ大学最初の公的規約といわれるものである。彼はその中で、神学の修学のあり方について「何人も三十五歳になるまで、また少なくとも八年間勉学をしたのでなければ、また熱心に書物について、しかも教場で講義を聴いたのでなければ、また公に自ら講義を行う前に五年間神学の講義に出席したのでなければ、パリで講義をなしてはならない。」と規定している⁵⁾。その後、こうした勉学の諸段階は十四世紀第2四半期までにより整えられていった。いま、十三・四世紀における神学の勉学の課程について概観すると以下のよう

【資料-1】

パリ大学神学部の「学位」の階梯と試験制度
～十三・四世紀パリ大学神学部規約より～

勉学期間・年数	学位名称 主な活動	試験
3年 ～ 4年	magister (doctor)	aulica/resumpta
	licentiatus	inceptio vesperiae
9か月	baccalarius formatus (上級バカラリウス) アウリカ、ヴェスペリアエ、ソルボニカ、 規定討論、通常の討論、年一回の説教、 コラッツィオに参加義務	licentia は、一年おきに授与。 試験：二年毎に行われた = 「聖年」の11 月1日前後（学科試験なし）。
	baccalarius sententiarii (命題集バカラリウス) 「命題集」四巻について講義	tentativa (temptativa) 「試問」
2年 ～ 3年	baccalarius biblicus (ordinarius) (聖書正講義バカラリウス) cursor (聖書速修バカラリウス) 第一コース、第二コース	試験 26-7歳になっていること。規定された 講義への十分な出席証明 (schedulae, cedula) を持って学部教授団の前に出頭し、 第一コースを願い出る。四人の教授による 試験の後合格すれば、学部長によりバカラ リウスになることを承認された。
5年 ～ 7年	auditor (audiens) 「聴講生」 「聖書」と「命題集」について学ぶ。 二年間「命題集」の講義に出席 四年間「聖書」の講義に出席	

21歳 学芸学部のマギステル

になるであろう⁶⁾。

学芸学部のマギステル位を取得した者は最初の5～7年間は単なる聴講者 (auditor) として聖書と命題集の講義を聴講する。その修学期間をおえると二十五歳以上に達していることを条件に、規定された講義への十分な出席の証明書 (cedula, schedula) を持参、学部教授団の前に出頭し、第一コース (primus cursus) を願い出る、そのとき四人の教授による試験が行なわれ、合格すれば学部長により正式に第一コースを講ずることを許された。すなわち、「聖書正講義バカラリウス」 (biblicus ordinarius) または「聖書速修バカラリウス (クルソル)」 (cursor) となったのである。彼は、プリンシピウム (principium) という公的な行事を行うことによってバカラリウスとしての活動に入り、一年間聖書のある巻の速読を続ける。次年度、第二コースとして聖書の他の巻を同じく速読する。

修学の第9年目になると、バカラリウスは「試問 (tentativa)」と呼ばれる討論会で応答しなければならなかった。その演習の結果が認められると「命題集」の正式の講読を許された。この結果、「命題集バカラリウス」 (sententiarus) となると二年間、十四世紀中葉より一年間 (= 九ヶ月) になるが、『命題集』を講ずる。この「命題集バカラリウス」の講義期間の短縮に関しては、托鉢修道会士たちの上級聖品への叙任年齢との関連性も指摘されている⁷⁾。

『命題集』の講読が終了すると「上級バカラリウス」 (baccalarius formatus) の段階に入る。彼らは3～4年間引き続きパリに在住し、公開討論会—ヴェスペリアエ、ソルボニカ等—や議論に参加するとともに説教を行い、宗教行事等にも参加しなければならなかった。

最終段階として、教授免許 (licentia) と「受け入れ式」 (inceptio) がくる。教授免許は三十五歳に達し、道徳性において問題がなく嫡出子であれば、また教育活動が適切であればパリ司教のカンケラリウスの召集した、パリ在住の現任及び非現任の学部の全マギステルによって作成されたリストに基づき学位を授与された。教授免許の授与は二年毎 (「聖年」)、諸聖人の祝日 (11月1日) に司教館において授与された。その後、マギステル位取得のための二日間にわたる公開討論会 (ヴェスペリアエ/アウリカ、レスンプタ) = 「受け入れ式」を経て、一人前のマギステルになる。

このように神学のマギステル位を取得する場合、計14年から16年という長い修学期間を費やすことになった。

(2) 三種類の大学人とバカラリウス

学位の階梯から考えてみると、中世の大学には三種類の大学人がいたことになろう。すなわち、「学ぶ者」としての学生、{学びつつ教える者}としてのバカラリウス、それに「教える者」としてのマギステルである。

中世末期、学位はその初期の「教育者としての適正を保証するもの」から実社会での経歴を保証するものとして、その機能を変質させるが、その本質は教師が自分たちの後継者を養成し、教師としての資格を認定しようとするものに他ならなかった。すなわち、教職的学位をその基本的性格と持っていたと考えられる⁸⁾。それは大学が教育機関であり、かつ教師のギルドであるところに依っている。このように学位の基本的性格をとらえるならば、一人前の教師（マギステル）になるための修練の諸段階こそ学位の重要な側面を示しているといえよう。

先ず、バカラリウスについては、その言葉の初出は、1231年の教皇グレゴリウス九世が発した教書「諸学の父」においてである。大学のマグナカルタと呼ばれるこの教書において神学のバカラリウスの役割が次のように記されている。「バカラリスたちのだれがどの時間にどの主題について講義すべきかということ…」⁹⁾。その後、1245年の学芸学部規約においてバカラリウス試験についての規定がみられる。語彙の出現は、それ以前に実態の存在が前提にあることを考える時、このバカラリスはすでに1220年代にパリ大学において存在していたと考えられる¹⁰⁾。

バカラリウスという言葉の意味は「未だ教授免許は持たないが教授の指導の下で講義を行う上級の学生」¹¹⁾であるとされる。従って、先に述べたように基本的には学生である。しかし、教える者でもある。では、教師であるマギステルとどのような点において異なるのか。教師（マギステル、ドクトル、ドミヌス—学部によりその呼び方は異なる—）は正講義や特殊講義（正講義と特殊講義の差違は、基本的には開講がなされる時間帯によっていた。）を行うことができた。また講義を行うことにより、学生から授業料を集めることができるとともに、公的給与を得ることを公認された者でもある。それに対してバカラリウスは、当初、正講義はできず、したがって金銭的報酬を受ける資格を持たない者であった。ただ、教場として使う場所代というかたちで金銭を徴収することはできた。

(3) バカラリウス学位と試験あるいは教育の階梯

先に述べたように神学部には、以下三段階のバカラリス位があった。すなわち、聖書を速く講読することを認められた「クルソル」(cursores) あるいは「聖書正講義バカラリウス」(baccalarii biblici)、聖書とともに神学部の主要テキストの一つ『命題集』を講読することを許された「命題集バカラリウス」、そして大学の重要な教育形態である討論等に参加し、「説教」を行い、大学の公的行事に係わる「上級バカラリウス」である。以上の三つのバカラリウスの段階は、十三世紀末あるいは十四世紀初頭には完成していたと考えられている。

マギステルやドクトルの学位が最終試験によって与えられたのに対し、バカラリウス学位はあくまで教職社会において中間身分であるがゆえにその最終試験に至るいわば「中間試験」による学位であった。したがって、マギステル、ドクトルのような明確な試験による学位取得と

いうより、長い期間の修学の積み重ねによって上記の各段階が承認されたというのが実態にそっ
ていると思われる。教育の課程とバカラリウスの各段階が緊密に係わりあっているということ
である。その修学の積み重ねをみる場合、神学教育のプログラムを明らかにしている資料は限
られている。十三世紀の初頭、十四世紀初頭、十四世紀の最後の四半世紀のそれしか手がかり
は残されていない。

Ⅲ. 教育の課程と学位の取得

(1) 教育の技法

神学部の教師に与えられた職責は「講義」(legere)、「討論」(disputare)、「説教」(praedi-
care) することであった。これらは、神学部における教育の方法として重要な要素となってい
たが、歴史的経過のなかでどのように変化していったのか、また如何なる状況において、教育
の技法として精緻化されていったのかについては未だ明確にされているとは言い難い。従って、
ここでは、大学の教育の方法として基本的な技法であった「講義」(lectio)と「討論」(dispu-
tatio)を概観しておきたい¹²⁾。

i) 講義 (lectio)

主たる教育の方法としては「講義」(lectio)と「討論」(disputatio)があげられる。前者は、
教父の注解や時代の権威書によって聖書について明らかにする聖書の注解の道具の役割を果た
した。講師の資格により二種類に分かれる。すなわち、正講義と特殊講義あるいは速修講義。
教授の注解は基本的に三部からなっている：divisio textus —テキストの区分及び下位区分の分
析—, expositio —真の注解—, explicatio textus あるいは dubia circa litteram —本文の諸問題
についての説明、解説、解釈—。バカラリウスによって為されるテキストの講読は速修 (lectio
cursoria) と呼ばれ、学生たちに本文の語彙、構造、区分、直接的意味を説明することであ
った。

ii) 討論 (disputatio)

いま一つ、大学の教育の展開にとって重要な方法が、「討論」(disputatio)及び「問い」(ques-
tio)という形式であった。十二世紀の後半に disputatio は lectio から分かれる。やがて、dis-
putatio は形式を整え十三世紀において disputatio in scholis あるいは私的討論—教師の教場で
行われ彼の学生のみが参加した—と disputatio ordinaria あるいは公的(正規)討論—教師の主
宰による演習であるが、彼の同僚の学生たちにも開かれていた—に分かれていった。討論は一
般に二つの段階で展開された。教師がテーマすなわち問いを選ぶ。そして、神学バカラリウス
に反論者 (opponens) と応答者 (respondens) の役割を割り当てる。まず、提出されたテーマ

について賛否の議論を教師が提示する，それに対し応答者が暫定的な解決をなし，反論者が反対意見を述べる。応答者がそれに応答する。反論者はさらに他の議論をもって反論する。そして，応答者がこれらの反対意見に反論を加えて終わる。第二段階の討論は，教師が先の討論会において出された議論を検討して最終的な解答を与える。この教育の一形態である「討論」はこの時期単に演習というだけでなく学生の試験という性格を持つようになった。

iii) 説教 (sermones)

大学の説教は，毎日曜日に行われただけでなく，全学部の祝日，神学部の祝日等になされた。大学団のメンバーは説教に出席することは義務であった。というのも，彼らは原則的に全員聖職者と見なされていたからである。主に，日曜日の説教はドミニコ会の修道院で，週日の説教はフランシスコ会の修道院において行われたが，それ以外の教会においてももちろんなされていた。

神学教育全体の仕上げがこの説教であり講話 (collatio) であった。いま，説教の技法について論ずる時，大学の説教と大学外の説教とに区別して論じる必要がある。以下大学の説教の技法について簡潔に述べておこう。

大学の説教は，聴衆を教え，説き勧めることとともに，教育をすることが目的であるので，以下の特徴がみられる。すなわち，ラテン語の使用，説明の学問性，聖書への精通，入念な技巧があげられている。また，説教のテーマは，聖書あるいはその日の典礼からとられ，通常，序論・展開・結びから構成され，聖母マリアへの祈願をもって閉じる。説教者は，聖書あるいは教父の権威書に依拠した。説教の際，選ばれたテキストの説明として，語義的説明，またテキストの解釈としては，歴史的，寓意的，比喩的，神秘的それに依拠するだけでなく，象徴法あるいは寓意の使用が支配的位置を占めている。

マギステルにとって説教は，職責に由来する義務の一つであったが，説教の職務への準備教育という点から考える時，その対象者はバカラリウスということになる。聖書聖講義バカラリウス，命題集バカラリウス，上級バカラリウス，特に上級バカラリウスは，リセンシアを得る前に，一年に一度，大学団の前で説教及びコラツィオ（講話）を行わなければならない。マギステルやバカラリスウによってなされたコラツィオとは，夕刻に行われる説教のことであり，そこで取りあげられるテーマは，午前中の説教と同様であるが，短く簡潔なものである点において，午前中の説教と異なる。

(2) 神学マギステルおよび「命題集」バカラリスによる教育

パリ大学神学部に学んだ学生たちの講義録が数点残されている。それらを手がかりに，当時の神学部の教育のあり様—それは他の学部の教育のありさまを垣間見させてくれるものでもあ

るが—を明らかにしよう。

i) リシャルル (Richardus de Basochies) の講義録にみる神学部教育の一断面

命題集バカラリウスの教育のあり様を、1392-1393学年度に神学の学生として命題集バカラリウスであったピエール・プラウスト (Petrus Plaoust) の講義を聴講したリシャルルの講義ノートに依拠しながら見てみよう。その際、以下の観点からとらえてみたい¹³⁾。

- ① 神学教育の実際—講義及びその配分—
- ② 学生の勉学の方法及びノートの記録としての「報告」(reportatio) について
- ③ 教授者と学生の子弟関係について

① 神学部の教育の実際

「命題集バカラリウス」が「上級バカラリウス」の段階に進む場合、一学年度（この時期は九ヶ月が一学年）に「命題集」の全四巻の注解をおえなければならなかった。一般に、大学年度は聖十字架の称賛の祝日（9月19日）に開始され、翌年の6月30日をもって終了する。

今、講義録に記載された「命題集」の講義日程についてみると、第一巻は10月11日から2月23日、第二巻は12月30日から翌年3月26日、第三巻は3月27日から5月17日、そして、第四巻は5月20日からの開始となっている。これらの日程とは別個にプリンキピア (prinsipia) と呼ばれる公開講義が各講義に先立って行われている。

リシャルルが出席した授業回数は、132回（病気や学位試験受験申請のために欠席した回数を含めると、140回近く授業があったことになる）。命題集バカラリウスの規約に忠実な講義ぶりもさることながら、学生たちの授業出席への熱心さにも驚かされる。この熱心さは、両者にとって学位取得と講義聴講が関連性を持っていたことがあったことは言うまでもない。既に述べたように、この講義録の当該者であるリシャルルは、講義を聴講したことを証明する授業聴講の証拠、ケデュラ (cedula) —バカラリスが記した—を有していないとバカラリウスの最初の段階に進むことを認められなかった（巻末【資料-2】参照）。

- ② 学生の勉学の方法と「報告」(reportatio) の技法
- ③ 教授者と学生との関係

リシャルルは、命題集バカラリウスであるピエールの講義をその時教養諸科のマグистерであったジョフロワ (Gaufridus Lestenger, 1397年に神学のリケンティアートゥスになる。) とともに聴講している。ピエールの下で、単なる学生であったのは2名であった。かれらの「命題集」の教授者であるピエール (Petrus Plaoust) は、彼の師ヨハネス (Johannes Luqueti, 1388年5月2日神学のリケンティアートゥス) の指導の下で「命題集」の教授活動に専念して

いたので、リシャルとジョフロワは神学マギステルであるヨハネスの下、すなわちヨハネスの教場で行われていたピエールの講筵に連なっていたということになる。ピエールの講義は好評で40年来匹敵する者のないほど多くの聴講者を集めたと、リシャルは記している。

こうした教授組織、教師と学生の関係が学位取得状況に重要な役割を果たすことになると考えられるが、こうした視点から学位制度について論じられてはこなかった。ただし、皆無であったわけではない。P. グロリュエは、パリ大学学芸学部におけるこの教師と学生の関係の重要性について次のように指摘している。「各学生は彼を教場に受け入れてくれる、また、彼について責任を負ってくれる教師を有していなければならない。特に、彼と同じ出身地、つまり、同じナシオの誰かを選んだ。だがこのことは義務ではなかった。教師の評判から費用まで極めて多様な選択の理由があったが、希望する人に自由につくことができた」¹⁴⁾と。

学位の取得における教師-生徒関係(子弟関係)の重要性を指摘した田中は、学芸学部におけるこの関係を分析する視点として、以下の3つを指摘している。

第一に、教場において相互の間のうち立てられた関係を知ること。この点に関しては、特に選ばれた講義を明らかにする必要がある。

第二に、日常生活において確立された関係を知るとともに、パリにおいて学生がいかなる教師の個人的指導の下で講義を聴いたのかを明確にすること。

第三に、様々な学位を取得するに際し、教師と学生の間が存在した関係を明確にする必要があるであろう¹⁵⁾。

学位取得の過程は、上記のごとくまさに勉学の課程・方法と密接に結びついていた。この点については、後日稿を改めて詳細に論じる予定である。

【註】

- 1) 横尾壮英『大学の誕生と変貌 —ヨーロッパ大学史断章—』東信堂、1999年、25頁。
- 2) H. Denifle et E. Chatelain, (eds.), *Chartularium Universitatis Parisiensis* (以下 C. U. P. と略記), Bruxelles, 1964, t. I, no. 20, p. 78-80.
・L. Thorndike, *University Records and Life in the Middle Ages*, New York, 1971 (rep.), pp. 27-30.
資料-1を参照のこと。
- 3) 田中峰雄『知の運動 —十二世紀ルネサンスから大学へ—』ミネルヴァ書房、1995年、365-366頁。
- 4) 田中峰雄、前掲書、365頁。
- 5) C. U. P., t. I, no. 20, p. 78-79.
- 6) H. ラシュドール、著 横尾壮英訳『大学の起源(上)』東洋館出版、1976年、361-370頁。
- 7) G. Leff, *Paris and Oxford Universities in the Thirteenth and Fourteenth Centuries*, New York, 1967, p. 167.
・J. Verger, 'L'exégèse, Parente Pauvre de la Théologie Scholastique?' (dans J. Hamesse éd., *ibid.*, p.

34)

ヴェルジェは、パリでは、25歳以前に、バカラリウスとして講読を始めることは禁じられていたと述べている。その理由として、25歳という年齢は、在俗聖職者にとって上級聖品を受ける年齢であったとの指摘もある。

- 8) 横尾壮英, 前掲書, 31-34頁。
- 9) C. U. P., t. I, no. 79, p. 136-139.
- 10) J. Verger, 'Nova et Vetera' dans le vocabulaire des premiers statuts et privilège universitaire français, in O. Weijers (ed.), *Vocabulaire des écoles et des méthodes d'enseignement au moyen âge*, Turnhout, 1992, p. 202.

ヴェルジェは、パリにおいて *baccalarius* という語は、1231年の初出であるが、おそらく1220年代には、すでに現れていたとしている。
- 11) J. F. Niemeyer & C. Van de Kieft, *Mediae Latinitatis Lexicon Minus*, Leiden, 2002, *baccalarius* の項。
 - ・ Olga Weijers, *Terminologie des Universités au XIII^e siècle*, Roma, 1987, pp. 173-180.
- 12) Monika Asztalos, *The Faculty of Theology*. (in: H. de Ridder-Symoens (ed.), *A History of the University in Europe*, Cambridge, 1992, pp. 419-441)

中世大学における一般的教授法は、講義 (*lectio*) 及び討論 (*disputatio*) によっていたが、神学部においては説教 (*sermones*) も重要な仕上げの教授手段であった。

 - ・ P. Glorieux, *L'enseignement au moyen âge. Techniques et Méthodes en usage à la Faculté de Théologie de Paris au XIII^e siècle*, (dans *Archives d'histoire doctorinale et littéraire du moyen âge*, 35 (1968), p. 65-186, spécialement deuxième partie)
- 13) P. Glorieux, *L'année universitaire 1392-1393, A Sorbonne à travers les notes d'un étudiant*. (dans *Revue des Sciences Religieuses*, 1939, pp. 429-482)
 - ・ P. Glorioux, Jean de Falisca, *La formation d'un maître en Théologie au XIV^e siècle*. (dans *Archives d'histoire doctorinale et littéraire du moyen âge*, 33 (1966), p. 23-104.)
- 14) P. Glorieux, *L'enseignement*, p. 93.
- 15) Mineo Tanaka, *La nation anglo-allemande de l'Université de Paris à la fin du Moyen Age*, Paris, 1990, p. 145.

【資料-2】

□ Richard de Basoches の講義「報告 (reportatio)」からみた『命題集』の講義日程

* 整理 番号	フォリオ (丁数)	日 付	整理 番号	フォリオ (丁数)	日 付
1	fol.15 16, 16v 17, 17v	1392年 9月14日) 10月 9日 プリンキピウム	18	32v 33, 33v	10月19日 土曜日
			19	33v 34, 34v	10月21日 月曜日
2	18, 18v 19	プリンキピウム 1393年 1月18日 1393年 1月19日	20	34v 35	10月22日
			21	35, 35v	10月23日
3	19, 19v 20	1393年 3月 4日 火曜日 プリンキピウム	22	35v 36	10月24日
			23	36, 36v	10月25日
4	20, 20v 21, 21v	1393年 6月12日 木曜日 プリンキピウム	24	36v 37, 37v 38	1392年10月26日
			25	38, 38v	10月29日 火曜日
5	21v 22, 22v	1393年 6月13日 金曜日	26	38v 39, 39v	10月30日
			27	39v 40	10月31日
6	22v 23, 23v	1393年 6月14日 ?	28	40, 40v 41, 41v	11月 4日 月曜日
			29	41v 42, 42v	11月 5日
7	23v		30	42v 43, 43v	11月 6日 水曜日
			31	43v 44, 44v	11月 7日
8	24, 24v 25	1393年 3月19日 ヴェスベリアエ, アウリカ	32	44v 45	11月 8日 (11月12日 火曜日 記す)
			33	45, 45v 46	11月 9日
9	25, 25v	1393年 3月20日 ヴェスベリアエ, アウリカ	34	46, 46v	11月12日 火曜日
			35	46v 47, 47v	11月13日
10	25v				
11	25v				
12	26 27	1392年10月11日 金曜日			
13	27, 27v 28	1392年10月12日 土曜日			
14	28, 28v	1392年10月14日 月曜日			
15	28v 29	10月15日			
16	29, 29v 30, 30v 31	10月16日			
17	31 32, 32v	10月17日			

36	47v 48, 48v 49	11月14日	59	59v 60, 60v	12月21日 土曜日
37	49, 49v	11月15日	60	60v 61, 61v	12月23日 月曜日
38	49v	11月16日 土曜日	61	61v 62, 62v	1392年12月30日 月曜日
39	50	11月18日 月曜日	62	62v 63, 63v	1392年12月31日 火曜日
40	50v 51, 51v	11月19日 火曜日	63	63v 64, 64v	1393年1月4日 土曜日
41	51v 52	11月21日 水曜日	64	64v 65	1月7日?
42	52	1392年11月18日 月曜日 (10数行記されているが線を引いて消されている。内容的に39と重複している。)	65	65, 65v	1393年1月8日
43	52	11月21日 木曜日	66	65v 66	1月9日
44	52, 52v	11月22日	67	66, 66v	1月15日 水曜日
45	52v 53	11月25日 月曜日	68	67	1月16日 木曜日
46	53	11月26日?	69	67, 67v	1月17日 金曜日
47	53, 53v	11月29日 金曜日	70	67 68	1月20日 月曜日
48	53v 54	1392年12月2日 月曜日	71	68, 68v	1月21日
49	54, 54v	12月3日	72	68v 69, 69v	1月22日
50	54v 55	12月4日	73	69v 70	1月24日 金曜日
51	55	12月5日	74	70, 70v	1月27日 月曜日
52	55v 56	12月7日 土曜日	75	70v 71	1月28日?
53	56, 56v	12月9日 月曜日	76	71v 72	1月29日?
54	57, 57v	12月10日?	77	72, 72v 73	1393年2月1日 土曜日
55	57v 58	12月11日?	78	73, 73v	2月3日 月曜日
56	58, 58v	12月12日?	79	73v 74, 74v	2月4日
57	58v 59	12月18日 ヴェスペリアエ, アウリカ	80	74v 75, 75v	2月5日?
58	59, 59v	12月19日 木曜日			

81	75v 76, 76v	2月8日 土曜日	100	91, 91v 92	3月26日 水曜日
82	76v 77	2月10日 月曜日	101	92, 92v 93	3月27日
83	77, 77v 78	2月12日	102	93, 93v 94, 94v	3月28日
84	78, 78v	2月13日 ?	103	94v	3月29日
85	78v 79, 79v 80	1393年 2月18日 火曜日	104	94v 95, 95v 96	3月31日 月曜日
86	80, 80v 81	2月20日 木曜日	105	96, 96v 97	1393年 4月1日 火曜日
87	81, 81v	2月21日 金曜日	106	97, 97v 98, 98v	4月11日 金曜日
88	81v 82	2月25日	107	98v 99, 99v	4月12日
89	82 83, 83v	2月26日 ? 水曜日	108	99v 100, 100v 101	4月14日
90	83, 83v 84	1393年 3月1日 土曜日	109	101, 101v	4月15日 火曜日
91	84, 84v 85	3月3日 月曜日	110	102, 102v	4月16日 水曜日
92	85, 85v	3月5日 ? 水曜日	111	102v 103, 103v	4月17日 木曜日
93	86, 86v	3月8日 土曜日	112	103v 104, 104v	4月19日 ? 土曜日
94	86v 87, 87v	3月10日 ? 月曜日	113	104v 105, 105v	4月23日 水曜日
95	87v 88	3月13日 木曜日	114	105v 106, 106v	4月24日 木曜日
96	88, 88v 89	3月15日 土曜日	115	106v 107, 107v 108	4月28日 ? 月曜日
97	89	1393年 3月20日 木曜日 ヴェスペリアエ, アウリカ (Philippe Parent のマギステ ル位の公開討論会は3月18 日, 19日に行われている。)	116	108, 108v	4月29日
98	89, 89v 90	3月22日 土曜日	117	109, 109v	4月30日 水曜日
99	90, 90v 91	3月24日 月曜日	118	109v 110	1393年 5月2日 金曜日
			119	110, 110v 111	5月5日 月曜日

120	111, 111v 112	5月7日	135	124v 125	6月6日?
121	112v 113	5月10日?	136	125v 126	6月7日
122	113, 113v 114	5月12日 月曜日	137	126, 126v	6月13日 金曜日
123	114, 114v 115	5月13日 火曜日	138	126v	6月14日 土曜日
124	115, 115v	5月14日 水曜日	139	126v 127, 127v	6月16日? 月曜日
125	115v 116, 116v	5月16日?	140	127v 128, 128v	6月17日?
126	116v 117, 117v	5月17日?	141	128v 129, 129v	6月18日?
127	118, 118v 119	5月20日?	142	129v 130, 130v	6月19日?
128	119, 119v	5月21日?	143	130v 131, 131v	6月20日?
129	119v 120, 120v	5月22日?	144	132 132, 132v	6月28日? 土曜日
130	120v 121	5月23日?	145	133 133	1393年6月30日月曜日
131	121, 121v 122	5月31日 土曜日	146	134, 134v 134v	
132	122, 122v	1393年6月2日?	注記：* は P. Glorieux の付した整理番号を示す。 cf. P. Glorieux, <u>L'année universitaire 1392-1393 à la Sorbonne à travers les notes d'un étudiant.</u> dans <u>Revue des Sciences Religieuses, 1939,</u> <u>pp. 429-482.</u>		
133	122v 123	6月3日			
134	123v 124	6月4日?			

NB. v. は写本の verso を, その他は recto を示す。

